論　説

中国語中級コミュニケーション教育における問題と改善の試み
―コミュニケーションクラスの実践活動を通して―

陳　　敏

はじめに

中国語を学ぶ目的は？と尋ねたら少し昔なら教養を高め視野を広げたいと答える人が多かっただろう。発音、文法、読解の学習で十分とは言えなくてもニーズを満たしてきた。しかし、今の学習者の大半は会話できることを主な目的にしている。筆者が日本の大学で学習者にアンケート調査し、中国語を学習する目的を尋ねたところ、中国人観光客と少し会話ができるようになりたいという回答を最近よく目にするようになった。2018年日本に来る中国人観光客数が838万人に達し、町中で中国語標識を見る機会や、中国語を耳にする機会が多くなり、バイト先で中国人に遭遇したりして、学生たちが身近に中国人や中国語の存在を感じたからであろう。

ビジネス関連業界や日本国内のサービス業において中国語を読み書きできるだけではなく、即戦的な会話力を持つ人材が求められている。日本の大学では第一外国語や第二外国語として中国語を学ぶ機会を提供している。第二外国語として一年間学んだ後、さらに二、三年間中国語を学び続けられるプログラムも開発され、正課の授業以外に短長期留学プログラムも併設して即戦力を持つ人材を養成している。

中国語教育においては初級クラスの教え方を重点的に改革が行われ、初級から会話タスクの導入、アクティブラーニング授業の導入など、新しいスタイルの授業を模索する動きが活発になっており、習った言語がすぐに使える言語にと目標を掲げて、勉強したのに聞き取れない、話せない状況を打開しようとしている。今は日本人教員とネイティブ教員との連携授業が一般化され、初級から「読む」「書く」「聞く」「話す」の四技能の養成を重視している。講義型とアクティブラーニング型を併用し、授業法も文法直訳法、オーディオリンガル法、コミュニカ

ティブ・アプローチを融合し、それぞれの利点を生かし、欠陥を補うように授業設計され、教材も開発されてきた。

そのため、中国語習得において難点であったピンイン学習や漢字を正しく発音することに大きく成果を得られたと感じる。しかし、依然として「聞く」と「話す」に関しては大きな前進が見られない。

筆者はこれまで日本人大学生向けの中国語教育において、中上級会話クラスを担当し、学生の会話能力を育成することを目指してきた。会話能力と一言で括っているが、語彙力、文法力、リスニング力、スピーキング力、異文化理解力を内包し、総合的な応用能力であり、習得しにくい。そのため、初級では発音、語彙、文法、読解を中心に基礎的な知識の導入を行い、大人数の会話クラスは発音練習が中心となり、聞き取りや暗記が主要な活動となっている。自己表現能力が育たなかったため、本格的にコミュニケーション能力を養うのは初級を終えてからとなる。

一年次の教養科目単位を修得した後、意欲のある学生が中上級に進む。二年次（中級）では連携体制を取らないことが多く、授業の自由度が増し、授業デザインは融通が利き、クラスは少人数になり、条件がよくなっている。しかし、教えた学生が教室外でコミュニケーション活動をうまく展開できているかと問われると自信を持って肯定的な答えを出せない。

本稿は筆者の教授実践活動を通して、これまでの中級中国語コミュニケーション教育における問題点を分析し、教室に取り入れた解決策の有効性を検証したい。

一、中級中国語コミュニケーション教育の内容

中級とはどういう基準であろうか。一年間の基礎教育を終えた学生に何を教えるべきかという問題を CEFR、HSK、中国語検定試験の基準から考えてみたい。

―CEFR 基準

ヨーロッパ共通参照枠 CEFR は、2001 年に欧州評議会が設定したもので、元々は EU 諸国で外国語学習者の習得状況を示す際に用いられるガイドラインであったが、近年欧州の言語だけではなく世界各国の言語能力の指標とされるようになった。HSK や中国語検定試験もこれを参照している。

CEFR が言語学習者を熟練した（上級）、自立した（中級）、基礎段階の言語使用者（初級）と分け、詳しく A1～C2 まで六つのレベルに分けた。

初級は A1、A2 レベルとされ、A1 は具体的な欲求を満足させるための、よく使われる日常的表現と基本的な言い回しは理解し、用いることもできる。自分や他人を紹介したり、どこに

住んでいるか、誰と知り合いか、持ち物などの個人情報について、質問をしたり、答えたりできる。もし、相手がゆっくり、はっきりと話して、助け船を出してくれるなら簡単なやり取りをすることができる。A2 はごく基本的な個人的情報や家族情報、買い物、近所、仕事など、直接的関係がある領域に関する、よく使われる文や表現が理解できる。簡単で日常的な範囲なら、身近で日常の事柄についての情報交換に応ずることができる。自分の背景や身の回りの状況や、直接的な必要性のある領域の事柄を簡単な言葉で説明できる。

中級は B1、B2 レベルとされ、B1 は仕事、学校、娯楽で普段出会うような身近な話題について、標準的な話し方であれば主要点を理解でき、その言葉が話されている地域を旅行しているときに起こりそうな、たいていの事態に対処することができる。身近で個人的にも関心のある話題について、単純な方法で結びつけられた、脈絡のある文を作ることができ、経験、出来事、夢、希望、野心を説明し、意見や計画の理由、説明を短く述べることができると定義している。B2 は自分の専門分野の技術的な議論も含めて、抽象的かつ具体的な話題の複雑な文の主要な内容を理解でき、お互いに緊張せずに母語話者とやり取りができ、流暢かつ自然である。かなり広汎な範囲の話題について、明確で詳細な文を作ることができ、さまざまな選択肢について長所や短所を示しながら自己の観点を説明できる[1)]。

A1～C2 レベルに合わせたおおよその学習時間数は以下になる。

（単位は時間）

言語	A1	A2	B1	B2	C1	C2
英語	80-100	180-200	350-400	500-600	700-800	1000-1200
仏語	60-100	160-200	360-400	560-650	810-950	1060-1200
独語	75	150（A2.1） 225（A2.2）	300（B1.1） 400（B1.2）			

（維基百科）

―HSK 基準

2007 年に中国国家漢語国際推広領導小組弁公室が「国際漢語能力標準」（国標と略す）を制定し、学習者の能力を会話と筆記から五段階で以下のように分けている。

一級	能基本听懂与个人或日常生活密切相关的熟悉而简短的话语，抓住相关信息。能用非常简单的语汇介绍自己或他人的基本情况。能十分简单地就日常生活中非常熟悉的话题与他人沟通。
二級	能基本听懂与个人或日常生活密切相关的熟悉而简短的话语，抓住相关信息。能用非常简单的语汇介绍自己或他人的基本情况。能十分简单地就日常生活中非常熟悉的话题与他人沟通。
三級	能听懂日常生活或一般场合下的交谈或简短发言，明白其大意，把握基本情况。能就与此相关的熟悉话题用简单的话语与他人进行沟通和交流，或作简单描述。

四級	能听懂一般场合下关于熟悉话题的交谈或发言，抓住主要内容和关键信息。能使用基本的交际策略就这些话题与他人进行交流，表达基本清楚，且有一定的连贯性。
五級	能听懂多种场合下的正式或非正式的交谈或发言，包括与自己工作或学习相关的讨论，能抓住要点，把握基本情况，明白说话人的目的和意图。能在多种场合下与他人就具体或抽象的话题进行有效的沟通和交流，并能就自己感兴趣的话题进行描述或论证，表达清楚连贯，详略得当。

（国家汉办《国际汉语能力标准》）

「国標」は、「聞く」と「話す」つまりコミュニケーション能力について1〜5級と分けた。初級は1級と2級で、個人や日常生活によく出る簡単な発話を聞き取れ、非常に簡単な語彙を用いて自己紹介や他者を紹介でき、日常によくある話題について他者と情報交換ができる。

中級は上、下に分けられ、下（3級）は日常生活やよくある場面の会話や簡単な発言を聞き取れ、大体の意味を理解でき、大まかな状況を把握できる。それに関連するよくある話題について簡単な言葉を使って人とコミュニケーションができ、或いはそのことについて簡単に述べることができる。上（4級）はよくある場面における身近なトピックについての会話や発言を聞き取れ、主な内容や重要な情報を掴める。基本的なコミュニケーション術を使ってこれらの話題について人と交流できる。表現が明確で、かつ一定な連続性を持つ。

上級は5級で、いろんな場面における正式や非正式な会話と発言を聞き取れ、仕事や学習に関するものを含め、ディスカッションし、要点を掴め、状況を把握し、話し手の目的と意図を理解できる。いろんな場所や場合において具体的なこと或いは抽象的なことについて人と意思疎通やコミュニケーションでき、かつ興味を持っている話題について叙述や論証ができ、表現が関連性を持ち、明確で、適宜な詳細さを持つ。

これに基づき、中国国家教育部（日本の文部科学省に相当）が中国語能力試験HSKを実施し、2010年度にCEFRと合致するよう、1級（A1）、2級（A2）、3級（B1）、4級（B2）、5級（C1）、6級（C2）に全面改定され、新HSKをスタートさせた。そのため、欧米各国の外国語テストとの互換性から難易度の比較がしやすく、世界のどの地域でも適切な評価を受けることが可能となった。

新HSKは級ごとに筆記とリスニングや口頭試験を設けている。上級（6級・5級）は中国語全般にわたる高度な運用能力を有し、流暢に自分の意見を表現することができ、3000語前後の一般常用語彙及びそれに相応する文法知識を持つ。中級（4級・3級）は中国語を母国語とする人たちと流暢に会話をすることができ、900語前後の一般常用語彙及びそれに相応する文法知識を持つ。初級（2級・1級）は中国語の基本的な日常会話を行え、200語前後の日常生活語彙及びそれに相当する文法的知識を持つとしている。

―中国語検定試験

日本国内の民間検定として最も歴史が長く代表的な試験は中国語検定試験である。CEFRやHSKは全世界向けで翻訳能力を問わないのに対して中国語検定試験は日本人向けで翻訳能力を問う特徴を持っている。試験はリスニングと筆記に分けて実施され、準1級より会話試験がある。レベルに対して以下のように定義している。

準4級	学習を進めていく上での基礎的知識を身につけていること。 学習時間60～120時間、基礎単語約500語による発音（ピンイン表記）及び単語の意味、日常挨拶語約50～80による語句・単文の中国語訳
4級	平易な中国語を聞く、話すことができること。学習時間120～200時間、 発音（ピンイン表記）及び単語の意味、常用語500～1,000による単文の日本語訳・中国語訳
3級	基本的な文章を読み、書くことができ、簡単な日常会話ができること。学習時間200～300時間、 発音（ピンイン表記）及び単語の意味、常用語1,000～2,000による複文の日本語訳・中国語訳。
2級	複文を含むやや高度な中国語の文章を読み、3級程度の文章を書くことができ、日常的な話題での会話が行えること。 熟語・慣用句の意味、語句の解釈、500字程度の中国語の文章の部分訳、30字程度の単文の中国語訳。
準1級	社会生活に必要な中国語を基本的に習得し、通常の文章の中国語訳・日本語訳、簡単な通訳ができること。 （一次）新聞・雑誌・文学作品・実用文などからやや難度の高い文章の日本語訳・中国語訳、及び熟語・慣用句などを含む総合問題。 （二次）日常会話、簡単な日本語・中国語の逐次通訳及び中国語スピーチ。
1級	高度な読解力・表現力を有し、複雑な中国語及び日本語（例えば挨拶・講演・会議・会談など）の翻訳・通訳ができること。 （一次）新聞・雑誌・文学作品・実用文などから難度の高い文章の日本語訳・中国語訳、及び熟語・慣用句などを含む総合問題。 （二次）難度の高い日本語・中国語の逐次通訳。

（一般財団法人日本中国検定協会）

会話能力について、初級（準4、4級）は挨拶ができ、平易な中国語を聞き話すことができる。中級（3級、2級）は簡単な日常会話ができる。日常的な話題での会話が行える。上級（準1級、1級）は日常会話や中国語スピーチができるとしている。

コミュニケーション能力に対してCEFRやHSKは、具体的なCan-do基準を設けているが、中国語検定試験は具体的には設けていない。

また、学習時間数は目安であり、HSKの基準は外国人全員に対するもので、日本は漢字語圏に属し、日本語に漢字を使用していることから、日本人中国語学習者は語彙や読解の面において有利であり、単純に学習時間数からその読解能力を図ることができない。しかし、コミュニケーション能力の習得にはその差がほぼないと考えられる。

では、大学一年次の中国語を終えた学生の到達レベルについて以上の基準に照らし、2年次

のコミュニケーション教育の目標設定がどうであるべきかを考えたい。

第2外国語としての中国語基礎教育は週2回、3回、4回など様々なコースがある。筆者が担当する基礎クラスは35人前後で、週3回、日本人教員、ネイティブ教員、パソコン授業（e-learning）の連携体制を取っており、1年間（30週）を通して、「新コミュニティカブ中国語 level 1」（岡田、絹川他、朝日出版社2010年）（新出語彙数800）と「新コミュニティカブ中国語 level 2」（新出語彙数800）を教材として学習する。教科書はCEFRや『国際漢語能力標準』を参考に、日本人教員とネイティブ教員によるチームティーチングを想定したクラスのためにデザインした。教科書の構成として、会話文、単語、表現のポイント（文法）の後にコミュニケーション（言い換え練習と問答練習）、補充単語、リスニング、練習問題（ピンイン、間違い直し、穴埋め、語順並べ、日本語から中国語への翻訳）に分けて1課を編んでいる。語彙量も練習問題も豊富と言える。「新コミュニカティブ中国語 level 1」には発音編があり、最後の課には記述文を本文とし、「新コミュニカティブ中国語 level 2」には3課ごとに記述文を1つ計4つ設けている。日本人教員が先導し、一回目の授業で単語と本文の発音、表現のポイント（文法）の説明、本文の読解（翻訳）をする。二回目は中国人ネイティブ教員が担当し、単語や本文の発音練習、コミュニケーション練習（言い換え練習と問答練習）を行う。三回目はパソコンを用いて、ホームページを見ながら、単語、本文、表現のポイント例文（文法）の音声を聞き、日本語訳などの再確認や復習を行い、リスニング問題や練習問題をこなして理解や定着を図る。

一年間学習した後、学習総時間数は135時間に達し、発音、リスニング、読解、作文の基礎的な知識を学び、基本単語1600個、文法を一通り学習した。大多数の学生はピンインをある程度正しく読め、ピンインがあれば単語を発音でき、平易な文章の意味が理解できる。単純に時間数や学習した語彙数から見れば新HSK3、4級あたりに達していると考えられる。しかし、日本人学習者にとって漢字が読解力の向上に大きく貢献しているため、実際に覚えている語彙数は読む時よりもかなり少なく、作文、聞き取りや会話に応用できていない。テストには合格するものの、使う練習の場もないことを考えれば、定着度は低く、春休み後はほとんど忘れている。

2年次最初の会話クラスで教師の中国語に戸惑う表情を見せるのが普通の光景である。教師の質問が聞き取れず、挨拶や簡単な自己紹介以外は話せない。簡単な中国語でも聞き取れない学生もいる実状からコミュニケーション能力はHSK1級程度といえる。これが生じたのは基礎学習の段階で実用的なコミュニケーション力を身に付ける練習が少なく、定着できていないからである。特にリスニング力の欠如によって会話が成立しないことが目立っている。

このような中級クラスでHSK1級2級3級に設定されているコミュニケーション能力の育成を目標とすることが必要と考えられる。レベル設定としては、中国語の非常に簡単な単語と

フレーズを理解、使用することができる（1級）。中国語を用いた簡単な日常会話を行うことができ（2級）、生活・学習・仕事などの場面で基本的なコミュニケーションを取ることができ、中国旅行の際にも大部分のことに対応できることである（3級）。

二、教授法に関して

語学の教授法としてさまざまなものがあり、代表的なものは文法訳読教授法、オーディオリンガル教授法、コミュニティカブ・アプローチ、直接教授法などである。

文法訳読教授法は伝統的な言語教授法で、読んで母国語に訳していくことを通して、文法の復習や語彙の増強を図れ、学習者の知的欲求が満たされ、文学的教養が高められる。文法規則の説明やそれに関する練習（翻訳、作文）を中心とし、理解することに偏り、文字に重んじて、音声を疎かにする傾向を持つ。成人は高度な学習技能を持ち，体系づけられた教材で言語学的な規則を学べばそれを利用できるという利点をもっているため、中国語の文法規則を学習し、漢字の知識を利用すればかなり高度な読解力を短期間で獲得できる。語彙の習得や語順の理解に有効ではあるが、この方法だけでは「聞く」や「話す」能力は育たない。

オーディオリンガル教授法（AL法：Audio-Lingual Method）は特定の生活習性はオペラント反応と呼ばれる「習慣強化」を通じて獲得されるという論理に基づき、外国語は口頭練習から始め、文字を排除し、聞くと話すことを強調する。文法の解説は明示的ではなく、パターン・プラクティス（Pattern Practice）という文構造の練習を用い、パターンを自動的に用いることができるようになるまで繰り返す。口頭による模倣と記憶によって聞くと話す能力を育成するが、パターン的、機械的なため、自発的に会話文を創造することに繋がらず、真の会話力を育てられないと共に、学習者の話したいことを無視しその意欲を損ない、パターン練習の繰り返しで学習者を疲れさせてしまう。このメソッドは、モチベーションの高い学習者にとって、文法を完全に習得し一定の語彙を学習した後、練習の意図を良く理解した上で行うと、リスニング力の向上には著しい効果がある。文法訳読教授法と同じく、クラスの人数やレベルの差を問わず行える方法であり、文法や語彙の習得も効果的で、ネイティブ教員が指導者であると正しい発音が聞く話す練習で習得できる。

コミュニケーション能力が、文法的に正しいか、実際に可能か、適切か、実際に生じるか、明確に伝わるかといった4つの側面の知識が必要と考えるのがコミュニティカブ・アプローチである。文法的に「正しい」文を用いる能力、意味のある談話・テキストを理解し、作り出す能力、言語が使用される社会的な文脈を判断して「適切な」表現を用いる能力、コミュニケーションの目的の達成を目指してメッセージを伝達する対処能力、言い換えたり推測したり、話を避けたりの方策などがふくまれる[2)]と考え、コミュニティカブ・アプローチは言語規則より

機能を優先し、学習者を中心とした教授法で、タスク・ロールプレイ、シミュレーションなどの方法を通して生活に近いコミュニティカブ的な練習を行う。学習者のニーズに合わせて学習でき、現実味を持つコミュニケーション活動で活用しやすいが、発音の練習や文法学習に時間を割かないため、発音が理解できる程度でよいとされ、文法的間違いも容認することになりがちである。知識の体系的な学習がしにくく、発音や文法の正確さが向上しないという欠点がある。

直接教授法は母国語などの媒介言語を排除し、直接外国語を用いて教える方法である。反復音読して発音を徹底的に行い、直訳直解を通して、語感を養う。新しい語句や表現を導入する際、実物や絵などを用い、ジェスチャーや既習語彙、構文からの類推などを指導技術とする。「音声を重視する」「語彙や文法は文脈の中で帰納的に理解する」特徴があり、音声面での学習が期待できるが、説明に要する時間が長く、適切に伝わったかどうかが不明で、学習者が十分に理解できていない可能性がある。授業時間が不足になりやすい上、理解できたと実感しない学生にとっては時間と労力の無駄とさえ感じる[3)]。

以上のような代表的な言語教授法はそれぞれ長短所があり、媒介言語を使って中国語の知識を一方的に教えることは短時間に大量のことを正確に伝えられるが、定着はしにくい。「聞く」や「話す」ことから自ら考え、気づくのは時間がかかり、効率が良くないが、定着率が高い。

基礎を終えた学生には基礎知識の復習が必要であり、インプットするために読み、聞き、暗記、パターン練習、ドリル訓練が必要で有効である。しかし、インプット活動に始終すると応用力が育たない。アウトプットするために、習った項目を実際に使い、自分で考え自己表現をするなど現実のコミュニケーションに近づけていく活動も必要である。学習者の状態に合わせて各教授法の利点をフルに活用させ、教室活動に取り入れていくことが必要と考えられる。

教師中心の一方的な知識伝達型講義形式ではなく、学生が協働して学び合うアクティブラーニング式学習が適しているため、教室内では学生が主役になって活動できるように授業をデザインし、ディスカッション、ディベート、グループ・ワーク等の方法を使い、学生に聞く、書く（話すための）・話す・発表するなどさまざまな活動に参加させ、知識の応用や定着を図る。

以上によって、一年次の基礎学習を終えた学生は習得した語彙や文法が定着しておらず、リスニング力が弱く、会話はできない状態に合わせて二年次中級の会話授業は以下のように行うべきと考える。

1、文法訳読教授法をできるだけ避け、内容理解や単純な記憶活動に陥らないように注意し、リスニング力と会話力を向上させることを中心に据え、「聞く」「話す」に効果的な直接教授法、コミュニカティブ・アプローチを使用する。

2、学習者中心の授業スタイルでアクティブラーニング型を取り、学生の聞く、話す、作文、発表などの活動を指導者が見守り、援助する。

3、授業はできるだけ中国語で行うが、理解を得られない場合は柔軟に板書したり状況に応

じて日本語の使用も可とする。

4、模範例文を提示し、音読することにより語彙の増強や文法知識を復習しながら応用力を高め、発音を正確にする。

5、飽きないために学習者の関心のある話題、活動を展開しやすいように学習者の身近によく会う場面、学習者が果たしたい役割などを基準に学習内容を定める。

6、興味を持たせるために、中国事情を学び、中日文化の違いに気付かせ、表現、討論することにより視野を広めて、レベルアップを図る。

三、教材について

会話教材については大体 1. 構造重視型（文法と構造）、2. 意味重視型（技能と話題）、3. 機能重視型（場面と機能とタスク）とこれらのミックス型である。

日本では英語や日本語教育の研究が進んでおり、コミュニケーション能力を高める教材が多数開発されている。「聞く」と「話す」練習を中心に編んでいるものも数多く出版され、コミュニケーション能力を育成する効果的な方法が沢山盛り込まれている。中国語の教材と比較するために、立命館経済学部が編纂した『Communication Skills1』を紹介したい。このテキストは家族、食べ物、お金、スポーツと健康、旅行など身近な話題を扱い、一課を三コマの授業時間を使い、以下のように編纂されている。

導入部分	ペアでまずテーマについてそのイメージを話し合う そして質問を一つ考えてペアで質問し合う 映像か録音を聞き、その内容をメモして、ペアで話す
「話す」ための準備	テーマについていくつか質問を用意させ質問し合う 提示の会話文２つを真似し、自分の例を二つ作成させる
アクティブ１	質問シートにある各質問にフォローアップ質問を作って ABAB 形式となるようにインタビューする インタビューの内容をまとめ、自分の考え及び理由を加えてペアで発表する。 学習者同士が互いに発表の出来具合を判定し、判定理由と一緒にシートに記入した後、発表した内容について二つ質問を用意し、質問をする
アクティブ２	テーマに関して社会や文化においていろいろなケースや違いをまとめた映像や録音を視聴し、内容を問う穴埋め式課題や質問課題を完成する
プレゼン準備	用意シート（1、自分の意見を言う 2、その理由を３個以上いう 3、結論をいう）を埋める
プレゼン	用意した内容をプレゼンした後、皆に質問したり皆からの質問に答えたりする
展開アクティブ	新たな単語を提供し、その単語を使って、相手に質問したり、自分の状況を話したりする

（『Communication Skills1』によって筆者が作成）

この教材は「聞く」と「話す」ことを中心として、教室活動はすべてコミュニケーションするために編み、ステップを設け、取り組みやすく、飽きない工夫がされている。

一方、日本で出版されている中国語中級教材は構造重視型が多く、一般的に最初に会話文の例文、新出単語、そして、中国の文化を紹介する記述短文、新出単語、文法説明、最後に練習問題などで一課が構成される。練習問題には語彙、翻訳など文法の定着をはかる問題を中心とし、コミュニケーション練習として、問答練習や本文の内容理解度を確認する質疑応答問題、少量のリスニング問題を設けている場合があるが、量が少ない上、自分で考えて話す創出練習をほとんど設けていないか取り組みのステップ分けがなく練習の目的を達成しがたい。教材のままで授業を進めると教師が教室の中心となり、解説や説明、音読活動が多くなり、自然に文法直訳法を取りがちで、インプット重視の授業になり創出活動につながらない。内容的に語彙的に、HSK1、2、3 級より難しい場合が多く、テキストの語彙学習や内容理解に時間がかかり、読解や文法練習で時間が取られ、「聞く」や「話す」練習時間を十分に確保できない面もある。

四、改善の試み

「聞く」「話す」能力をアップさせる効果的な教授法をとりやすく、学生が興味を持てる教材が必要不可欠であり、適切なレベル、かつ飽きない内容であることが望ましい。学生のレベルの個人差に対応しやすくするために、「聞く」「話す」のバランスを考慮し、難易度別に段階を分けて、「聞く」「話す」活動を展開しやすくなるように練習タスクを課す必要がある。

適切な市販教材が乏しい状況の中で、既存の教材を利用しながら、基礎を終えた学生のレベルに合う「聞く・話す」活動に重心を置くような授業スタイルを思案し、改善を試みた。

内容に関して、学生のよく遭遇する場面や関心のある話題で編んでいるものを選ぶことを優先し、学生のレベルに合わせて一課ごとの新出語彙は少ないものを適切と考え、教材を「中国語への道　準中級編　―浅きより深きへ―」（内田慶市、奥村佳代子他、金星堂 2014）に選定した。この教材はテーマごとに会話文、新出語彙、文法事項、短文（中国事情に関する内容）、新出語彙、練習問題（文法とリスニングの練習）という構成になっているが、読解するには既習した知識と辞書を使えば学生自身でも行えるレベルであり、「聞き」「話す」タスクを付ける時レベルアレンジがしやすく、内容には中日文化の違いが含まれており、ディスカッションやディベート用に作り替えられる利点がある。テキストの内容理解を助ける現実味のある中日異文化に関する映像をネット上で探し、視聴資料を用いて学生に興味を持たせることができると考えたからである。

会話力を育成するためにリスニング力、語彙力、発音、文法力、作文力、異文化理解力を全般的に高める必要があるが、時間配分を考慮した上、語彙、テキスト理解、文法確認など予習

の課題に、映像教材台詞の書き取り、内容要旨作成、発表用作文などを宿題とし、授業時間はできるだけ学生の聞く活動（input）と話す活動（output）に充てるようにする。

リスニング練習を増やすため、教材の会話文と短文に対してリスニング練習用に難易度別の補助教材を作成し、授業はリスニング練習から始まり、ステップを分けて、会話文や短文の内容に関する穴埋め、質問の書き取り、質疑応答で難易度を少しずつアップして聞く練習をする。そして、内容の要約を口頭でしたりして、テキストの内容の定着をはかった後、同じ場面においての会話を作ったり、自己主張をしたり、自分の考えを述べたりする話す練習をする。そしてテーマに関連する中国語の映像を視聴し、中国文化の理解から中日文化の違いに気付かせ、その違いや自分の考えを述べる応用練習で一課を終えるように授業をデザインした。

五、教室での活動

一課につき二回の授業時間を使用することにし、各課の前に会話文、新出単語や文法を予習する宿題を出す。授業の具体的なプロセスは以下となる。

一回目の授業

1、会話文に基づいて虫食い問題を用意し、授業開始時にCDを聞きながら穴を埋める。

2、正解や他の部分の内容を確かめるため、テキストを見る。理解不能な語彙や文の有無や文法の確認をする。（基本的に学生が中国語で質問し、教師が中国語で説明する）

3、音読練習（ペアリングで一回練習した後、テキストを見ずに教師の発音の後にリピートし、CDにシャドーイングするなど）

4、文法項目を使った口頭作文練習（テーマの内容に合う単文の自由作文）、発表させてマスター度合いを確認する。

5、テーマに関連する語彙について学生全員に一個ずつ全員が言えなくなるまで言わせる。（語彙の復習と聞き取りの練習を図る）、更に学生が知りたい語彙について語彙を補足する。（話す準備）

6、5に挙げた語彙を使い、センテンスを全員に一句ずつ言ってもらう。（文法項目の復習と確認、話す準備、聞く準備）

7、会話文の内容に関する質問文を教師が用意し、質問を書き取り、口頭で答える練習をする（場合によっては書き取らせずに口頭で回答してもらう）。同時に日本の場合や学生自身の場合はどうであるか質問をし、答えてもらう。

8、教師が会話文の内容要約や感想を中国語でまとめ紹介したりして言い聞かせる。（聞く練習）

9、ペアか小グループでロールプレイをする。同じ場面の応用会話を作る。（教師が教室を回ってサポートする）

10、発表をする。同時に他のグループの発表を聞き、内容要約を口頭でしたり、評価したりする。（学生のレベルによって日本語でも可）

11、短文部分の予習を宿題として出し、それに関しての感想、自分の場合や日本の場合はどうであるかという内容の作文を宿題として出す。（必要語彙や文法項目の復習を促し、次回ディスカッションやディベートの準備をするため）

二回目の授業

1、短文の内容に関する質問文を書き取り、短文の音声を聞かせてから、答えさせる。

2、短文を音読させ、1の練習の正誤を検証する。

3、教師が短文の内容について口頭で質問し、答えてもらい、要約を中国語で言い聞かせ、理解できているかどうかを確認する。

4、前回の宿題（作文）の発表（グループ発表やクラス発表、ディスカッションやディベート）

5、発表内容の確認（他の発表者の発表内容の要約を言う）

6、映像教材の導入

7、映像を視聴する。内容に関する質問を用意し、学生に答えてもらう。

8、映像に日本の状況と違う部分、学生が興味を示した部分や新しい発見のある部分について質問して考えさせ、話して聞かせる。

9、映像の内容や感想を言う。

10、作文宿題の回収（添削して返す。文法、表現の適切さなどの検証と指導）。次回の予習と意欲のある学生に映像のセリフの書き取りや感想文の作成を宿題として出す。

授業中学生の理解状況に応じ、中国語の板書をして、理解を助けたりする。学生の予習の宿題の完成度や内容の難易によってプロセスを選択し、時間配分も調整し柔軟に行った。

六、学習効果

「聞く」と「話す」能力は短期間で高められるようなものではないが、以上の教室活動の効果検証、学生の要望や意見を聞くため、アンケート調査を二つのクラス（15人と16人）に実施し、26名の回答を得た。

1、教室活動がどの能力を高めるのに有効だと感じ、実際に高められましたかの設問に対して高められたと選んだ学生人数順で以下の表をまとめた。

教室活動	能力	高められた（学生数）
1. 語彙、文について教師の中国語説明を聞く 2. 会話文や短文内容に対して中国語での質疑応答 3. 日本や自分の習慣、考えを紹介する作文	聞く 聞くと話す 書く	20/26 20/26 20/26
4. 中国の文化を紹介する映像を視聴する	聞くと読む	18/26
5. 各課のテーマに沿う会話練習や話合う練習ディスカッション、ディベート 6. 作文したものを発表する 7. 日本と中国の違いを考え、話す	話す 話すと聞く 話す	16/26 16/26 16/26
8. 会話文や短文の中国語要約を聞く	聞く	15/26
9. 映像の内容について感想を述べる 10. 映像の内容について書いたりする 11. 映像の内容について中国語で話す	話す 書く 話す	12/26 12/26 9/26

この表から教室活動の効果については、テキストに基づく１と２の活動、難易度別に練習を用意した４の活動、十分に準備する時間がある３の活動に対して効果的と感じた学生が多く、正確さが確かめられ、ほぼ全員のレベルに合っているからであろう。３の活動に対して作文の能力を高められたと考える学生が多く、次の授業で話すための準備として語彙や文法の事前学習としての教師の意図と違っている。一方、十分に準備時間がない場合や正確さを確かめられない11、9、10の活動はあまり有効な練習と感じなかったようである。理解できていない語彙や部分があり、レベル的に高いからであろう。

授業活動に対して良いところとして「ほとんど中国語だから、中国語を聞く話す機会が多く、アウトプットする時間が多い、宿題があるので時間がより濃いものになる、自由、生徒とのコミュニケーションを大切にしている、中国に関する映像が見られる、分からない中国語を繰り返し言ってくれる、中国語についての意欲が増す、中国語を使って話したりして聞けるようになった」などが挙げられた。

良くないところは「わからないまま進むことがある、レベル高い、黙ってしまう、中国語だけで日本語が少なめなので理解が難しい、映像を見るのは良いが、わからない文法や語彙があるためその説明がない。映像が長いと眠くなる」が挙げられた。

2、到達度については学生が以下のように自己評価している。

能力	あまりできない	少しできる	ある程度できる	よくできる
聞く	4名	15名	7名	0名
会話	5名	17名	4名	0名
発音（ピンイン）	2名	14名	9名	1名

発音 （漢字のみ）	3 名	19 名	4 名	0 名
読解	2 名	15 名	8 名	1 名
作文	8 名	12 名	6 名	0 名

「聞く」と「話す」能力について少しできるとある程度できると自己評価している学生は 20 名以上で、「聞く」と「話す」ことに少し慣れてきた証と考えてもよかろう。

3、今高めたい目標について、一位として選んだのは話すが 17 名、聞くが 7 名、語彙が 2 名、発音が 1 名、二位に選んだのは聞くが 11 名、話すが 7 名、語彙が 2 名、文法が 1 名、三位に選んだのは発音が 8 名、語彙が 5 名、文法が 2 名、読解が 2 名、聞くが 1 名、作文が 1 名。一位しか選ばなかった学生が 5 名おり、2 人が三位を選ばなかったが、話す力（24 人）や聞く力（19 人）を不足に感じている人が最も多く、ほとんどの学生が話す力と聞く力を高めたいと考えていると言ってよい。

4、教材や映像教材に対して、「読む力がつく、興味深い内容、面白い、わかりやすい、映像を見る機会があって嬉しい、ネイティブの発音が聞ける、実際の中国語を聞けて色々な単語を知れる、最近のスラングのようなものも学べる、中国の作品を見られるので面白い、YouTube を使って親近感を寄せているところ、日常での中国の生活がわかって面白かった、普段見ないから楽しい、内容が面白い、文化が分かるし面白い、リスニング力がつきそうで、どれも見ていて楽しく中国語を学べるので、面白そうで、楽しく中国語が聞ける、中国についての知識が高まった」など、学生が楽しく学べると評価し、1 の調査で聞く力を高められるほか、学習の動機付けやモチベーションアップにも非常に有効だったと考える。「訳がないとわからない、内容がわからない時がある、難しい、日本語訳がないと本当に勉強になっているのかわからない、YouTube の映像が面白いが、たまに字幕（中国語の）がないのは難しい、早すぎるのがある」と不安の声も見られる。

5、授業に興味を持てるかどうかの設問に対して、すべての学生が授業に興味を持てると回答した。その理由として「だんだん先生が言っていることが分かるようになったから、だんだんと聞いて単語が分かって何となく意味を察せるようになってきた、楽しい、日本と中国の違いが面白い、先生が中国語で話しているのを理解できるようになりたいと思った、応答できた時楽しいと感じられるから、それぞれの内容が身近で面白いから、一回生と比べて日本語が少なくなったので、もっと中国に近づけた気がする。文化の違いも学べたから、一回目の授業は知らない人ばかりだし、説明もすべて中国語だったので、とても不安だったけど、回数を重ねるとわかってきたし、慣れてきたため楽しく受けられるようになった。映像が面白い、会社に入ってから使えるため、最近自分が知っている単語を使って会話で

きていると感じるようになった、最初は全く分からない単語だらけだったが（分からなすぎてつらかった）、今はある程度理解できるようになったので楽しい。生徒が主体で学べるため、教科書だけでやるのではなく会話が多いのが楽しい、話せるようになっていると感じたから、ある程度聞き取れるようになると楽しくなる」などが挙げられている。実際に聞き取れるように話せるようになったと実感した学生が15名で、映像が面白いという理由も多かった。

6、授業の満足度に関する設問に対して全員から満足という解答を得た。理由は「面白い、楽しく中国語の練習ができ、着々と実力がついている気がする、できるようになった」と多数の学生が実感し、「この授業がきっかけでもっと中国について知りたいと思えた」なども挙げられ、自由なスタイルや課題の量が適切と評価し「毎週授業に行くのが楽しみです」と評価した学生もいる。

7、授業への要望に関しては「もっと自分で表現したい、中国語での説明をゆっくり話してほしい、単語の発音の時間（先生が読んだ後に生徒も読み上げる）がほしい、中国語のアニメを見たい、中国の映画とかを見たい、中国に行ったことがないので、中国ではどのようであるなどということをもっと聞けると嬉しい」など、言語そのものだけではなく中国について知りたい願望を強く持つようになったと感じ、「検定やHSKを受けたい、中国に行きたい、中国と関係のある場所で働きたい、留学に行きたい」と将来の目標もできたようである。

七、問題点

アンケート調査の結果から、学生たちが「聞く」と「話す」能力が高められたと実感でき、授業の仕方や教材に対して肯定的な評価を得ていると言えよう。しかし、筆者が教室活動の中で感じる問題点も少なくない。

1、リスニングに関して

直接教授法を用いたため、意思伝達がスムーズにできるようにレベルの低い学生に合わせて平易な語彙や表現を使いがちで、自然な速度ではなく、ゆっくり話してしまう。学生が教師の中国語に慣れるまで何度も繰り返したりして理解に要する時間が長く、授業の進行を遅らせてしまうことはよく生じた。そこで理解できていないことを放置し次に進むと学生は不安が大きくなり、途中で諦めてしまう。板書などで補うことをすると学生は最後の板書を期待して理解する努力を怠ることもある。

発表者の発話を聞くのも重要なリスニング練習であるが、発表者のレベルの差があって、長

い話や難しい語彙が多い発表になると聞き取れなくなり、集中できずにクラスの雰囲気は散漫になる。

映像教材の視聴時、中国語字幕のないものを選んで聞かせる場合がある。自分の聞き取ったものは正しいかどうか自信を持てないと内容について話す活動が鈍くなったり、続かなくなったりする。他者との話し合いから正しいものを引き出す能力が不足して、間違いを恐れることから積極的になりにくい日本人的なことも影響している。字幕があると理解できた確信が得られるが、音声を聞く効果が半減してしまう。

2、発音や語彙文法の間違いに対して

学習者の話す意欲を損なわないため、発音や語彙文法の間違いを基本的に訂正していない。正しく言い直して聞かせる場合があるが、本人の気付に委ねるため、効果が現れるのが遅い。作文の添削を通して正しい言い方を習得してもらいたいが､効果があったかどうかわからない。

3、作文の問題

文法事項を使った単文作文の練習ではつまずきがよく見られる。その文法事項を使って何を言うかの問題に遭遇する。自由度の低い翻訳課題にしたり、教師が場面を設定して、この場合にどういえば良いとヒントを出すと出来るようになる。例えば因果関係を表す接続詞を使って作文する場合、経済学を学ぶ理由を述べてくださいやバイトする理由を言ってくださいなど中国語でヒントをあげる。しかし、自由作文をさせると、言うことが見つからないことがよく生じる。

その理由として、文法事項が実際に使われる情景を想起できないことや、思い付いた文に言えない語彙があるなど既習語彙の制限を受けてしまうことが頻繁に起こっていると考えられる。

4、グループでロールプレイ時の問題

テーマに関して何を言うかどういうかは会話する者の自由であることから、会話の内容に関して、タスクの明確性とレベルにふさわしい内容であるか、語彙、文法の応用ができているかなど、到達度に関しては設定ができなくなるため、表現に豊かさがなく平易な会話になってしまう問題がある。中国語の適・不適、あるいは 自然・不自然を指摘しにくく、間違った表現が身に付いてしまう恐れがある。

また、意欲のないグループが作る会話練習は短い会話になりがちである。会話は話す同士の相互行為で、お互いにフィードバックの機会を与えなければ、会話が続かない。実際の会話は知らないことを知るために行うもので、既に知っていることに対しては会話する必要がなく、情報の欠落があってこそ会話する意義や面白さがある。学生同士は普段の生活ですることは似

ており、お互いに知っていることが多く、わざわざ中国語で会話して知る必要がないテーマに関して、課題完成のための会話になってしまい、会話した満足感が得られず、継続の意欲を損なう。そのため、なるべく普段よく話す同士でグループを組まないようにしたり、グループメンバーを換えたり、新鮮さを保ち、新たな友達ができるようにしたが、更なる工夫が必要と感じる。

5、教師のサポート活動における問題

ペアやグループ練習の時、学生同士のレベルの差や練習に取り組む意欲の差がある。グループ数や人数が多いと、問題に直面した時は大体学生同士の努力に委ねる。つまずきが生じた場合、会話が続かないグループは日本語で雑談を始めたりする。教師が他のクループをサポートしている時、助けを得られず、レベルの低い人や意欲の薄い人ほど勉強効果が上がらなくなり、ロールプレイが安易な方に流れる。

6、ディスカッションや発表時の問題点

ディスカッションやディベート進行が鈍くなった時、教師が練習を助けるために主導権を握ると進行がスムーズになり、学生は話した実感が得られ、練習できたと感じるが、主導性を育てることが難しく、受動的になり、実際の場に応用できる会話力の育成に繋がらない恐れがある。また、語彙の制限を受け自由に表現できないため、ディスカッションやディベート自体がうまく展開できないことも多く、有効な支援法を考えなければならない。

発表の時、原稿を読み上げではなく自分の言葉で言うのが理想だが、原稿の読み上げになってしまい、難しい語彙を多用した発表や内容的におもしろくない発表、話し方や発音が明瞭でない発表などは、聞く者の意欲を損ねる。原稿の用意ができていない学生はグループ内やクラスの発表から外され、練習になっていないケースもある。また、発表者以外の学生が授業に注意散漫になりやすい。それを防ぐために、発表内容に関する質問に答えるタスクや要約を言うタスクを課してあるが、意欲の薄い者、発表者の話を聞き取れない者、発表者の内容に興味がないなどから改善しにくい面がある。

7、映像教材の問題点

授業にメリハリを持たせ、映像が「聞く」ことを助け、分かりやすくなるなど映像教材の使用に魅力的な点が多く、学生からも高く評価されている。基本的に中国語字幕の付くもの、時間は5分前後、テキストの内容と関連がある中国事情や文化を含むものを選ぶ基準にしている。内容豊富なネットを利用し、YouTube から映像を選定するが、学生のレベルに合った適切なものが見つかるには相当な時間がかかったり、見つからなかったりする。選定したものがそれ

ほど学生の興味を引き起こさないこともある。

リスニング教材として使う場合には、リスニング用の課題をあらかじめ用意する必要がある。映像は中国で作られたものが多く、速度が速く、訛りや生活音などの雑音が混じり、聞き取りにくい面がある。1回の視聴では意味を取れない場合がほとんどで、意味を確認する問答練習をしながら二、三回見ると授業時間が不足となり、課外での視聴で補わなければならないことを生じる。セリフの書き取りなどの課題に関して、量が適切かどうかという問題もあり、学生によると七分間の映像セリフの書き取りに4時間も使ったことがあると言う。映像に関する課題を完成できなかった学生が多数いるため、全員に要求することができなくなった。

8、定着の問題

授業時に教師の話が分かるようになった、話ができるようになったと実感しても、本当にレベルアップしたかどうかについてはわからないため、学生は自信が持てない。教室でできたことは実際にもできるとは限らず、時間が経つと忘れる。レベルを維持するために、授業では直接法でできるだけ中国語で話し、聞かせることを通して復習させているが、普段繰り返す回数の少ないものはやはり定着しにくい。テストを活用して復習させるがやはり不十分と感じる。課外に留学生やネイティブ教師と話す機会など中国語を使える環境を作っても利用する学生が少ない。

まとめ

以上述べてきたように、これまでの中国語コミュニケーション教育が「聞けない･話せない」学生を生んだ一因として、レベルに合う教材の不足や、「聞く」と「話す」能力を伸ばす教授法を教室活動に採用されていない或いはスムーズに展開できていないためと考えられ、クラスでの実践活動の調査結果から、改善法の有効性が確かめられたと言える。

中国語中級以上のコミュニケーション教育に対して、個々の教室で個々の先生の判断で行われ、指導者側は教室活動の方法や、学習者への動機付け、話題を広げて意見や感想を話させることに困難を感じている。学習者の関心がある話題を適切なレベルで編み、会話力アップに有効な活動を行えるシリーズ教材の欠如が一番の問題と感じる。

学生のレベルから相応しい目標設定をし、国際的な会話レベルの基準にあわせて段階を分けて教材を作成する必要がある。読解による語彙の学習、表現や文法の復習、聞き取りなどの活動による語彙や発音の暗記などは一年間基礎学習を終えた学生の現状から省略のできない教室活動と判断するが、会話力の養成を中心に据え、インプットとアウトプットのバランスを適切に設定する必要がある。インプットにおいて特に聞き取りの練習を増やす必要があり、アウト

プット活動として、読解した会話文、視聴した音声、映像、ニュース、ドラマなどに対して、質疑応答したり、学習した表現を使って口頭で要約発表したり、会話（インタビューなど）で情報交換したり、意見や感想を述べたり、説明や報告をしたり、原稿を作って或いは作らずにスピーチするなどの練習を設け、タスクや方法を明確にした教材が必要である。

映像や他のレアリア素材を教室活動に積極的に取り入れることは学習者の興味を引き、自然な発音や表現を身に付けられ、既習項目の確認や、社会や文化的背景、ものの考え方について学べる利点が多数あり、アンケート調査などを行い、日本人の若い学習者にとって興味・関心のあることを掴み、ネットから映像資料を選定しURLを張り、効果的な活用法や、学習支援の具体的方法を考え、教材に盛り込むとより授業に取り入れやすくなる。

言語学習には学習者自身の努力が不可欠である。学習者を動機付け、学習意欲を強めることが大きな課題である。アクティブラーニングは学習者が主体として役割を果たし、積極的にコミュニケーションすることによって学習効果を高められる。技能本位の目標ではなくモチベーションが高くなるような短期や長期の目標設定を指導することも効果的であろう。例えば、バイト先での使用や中国人の友人との交流、短長期留学する、ネットでの流行りの歌バンドや映画ドラマを楽しむなど。可能であれば、中国人留学生と日ごろの交流の場を作り、また今流行りのSNS上で学習するクループや集団を作り、そこで会話したり、投稿したりすることによって実際に中国語を使う機会を提供する。

注

1）ブリティッシュ・カウンシル、ケンブリッチ大学英語検定機構

2）『第二言語習得研究に基づく最新の英語教育』SLA研究会編　大修館書店　1994

3）「英語教育における訳読教授法の功罪およびその効果的活用に関する一考察」早田武四郎　加澤恒雄　和歌山大学教育学部教育実践研究指導センター紀要No.4　1994

参考文献

1.「IBDP 中文初、中级与国家汉办《国际汉语能力标准》口头能力测试标准的对比研究」古鵬（Giuseppe Grispino）首都师范大学硕士学位论文　2018

2.「小・中・高・大学生の自己評価と英語力に関する研究 —CEFRに基づくCan Doリストとケンブリッジ英検模試を用いて—」米田 佐紀子、細川真衣、西村洋一、物井尚子 中部地区英語教育学会 紀要（42）2013

3.『中国語教育とコミュニケーション能力の育成—「わかる」中国語から「できる」中国語』胡玉華　東方書店　2009

4.「中国教育における中国文化紹介の試み」小川快之　言語文化論叢（38）〈千葉大学〉 2009

5.「中国語教育におけるアクティブラーニングに関する一考察　—同志社大学グローバル・コミュニケーション学部中国語コースでの試みを中心に—」楊奕　同志社大学学習支援・教育開発センター年報9

号　2018
6.「アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換」溝上慎一　東信堂　2016
7.「中国語の授業に取り込むアクティブラーニングの試み」蘭梅　流通科学大学論集―人間・社会・自然編―　第29巻第1号　2016
8.「中国語授業におけるアクティブラーニング」李大年　九州大学学術情報リポジトリ　2018
9.「中級中国語教育における「聞く」と「話す」」陳浩　慶応義塾大学語学視聴覚教育研究室紀要30、1997
10.「“辩论”式中级汉语会话教材开发：以发挥学习者的能动性为视点　ディベート式中級中国語会話教材の開発　―学習者の主体性を活かすアプローチ」張恒悦　外国教育のフロンティア（2）　2019
11.「中国の大学における日本語コミュニケーション教育に対する捉え方についての考察　―日本語教師への半構造化インタビューを通して―」秦松梅　平成27年度「学生海外派遣」プログラム報告集　お茶の水女子大学グローバルリーダーシップ研究所　2017
12.「中国の大学の日本語授業における会話指導に関する調査 ―中・上級レベルを対象とした教室活動の実態と教師の意識―」長坂水晶・木田真理　国際交流基金　日本語教育紀要　第7号　2011年
13.『Communication Skills 1』立命館大学経済学部編

（陳　敏，立命館大学言語教育センター外国語嘱託講師）

汉语中级口语教育的问题和改善方法
—通过会话教室的实践活动来看—

随着中国经济的高度发展，日本社会对具有汉语会话能力人才的需求日益高涨。因此日本的大学汉语教育也越来越注重听说能力的培养。然而，和英语、日语的教学相比，日本大学在汉语的听说教学方面还存在很多亟待解决的问题。本文首先对日本大学的中级汉语口语教育的内容，教学法，教材进行分析，发现其中存在的问题。继而在笔者担任的中级汉语会话课中寻求和实施相应的改善方案，并通过调查报告验证这些方法的有效性。

（陈　敏，立命馆大学语言教育中心汉语讲师）